教師たちの中の教師へ

● 全員参加の授業

宮城県千貫小学校著

日本の実践家 向山さんへ。

あなたの存在は、

僕にとても勇気を与えて

くれました。

日本の教育は明るいことを

教えられました。

'89 8/22 州 6:20 クカハシ ケイイチ

●シリーズ「教育創造」

1	三段方式による個別指導	富山市奥田小学校著	六〇〇円
2	教材と学習集団	秋田県尾去沢小学校著	六八〇円
3	教師たちの中の教師へ ●全員参加の授業	宮城県千貫小学校著	六五〇円
4	考えさせる授業方式	京都教育大学附属京都小学校著	六三〇円

というように、約十段階にわけ、段階ごとに一問ずつ出題し、ノートに解かせ、ひとりひとりを点検し、○×をつけてやってみた。誤答の場合やりなおしも認めた。十問をおわり、いよいよG問題にはいるとき、図の見かたを徹底的に教えた。この結果、三十六名中、三十二名まで理解できた。このG問題を解かせる実践の中で、私はつぎのことがわかったのである。

(1) 問題を子どもの興味にあうようにつくってだすと、子どもたちは、数字や図そのものに対する抵抗をうち破って、はっきりした思考と理解とをしめすこと。

(2) 低い段階からステップをふみつつ高い段階へ進めると、三年生としては、深い思考を必要とするGのような問題をも、数多くの子どもが解くことができること。

(3) この授業に要した時間は、約百分。子どもたちは興味のある問題であれば、長時間学習に集中することができること。

段階的指導などは誰でも知っている。ただ、理屈としては知っていても、その場、その場に応じて新しく自分の力で、それをつくりだし、具体的に実践することはむずかしいもの。

余談はさておき、このG問題の授業の成功が転機となり、Aの実践、旗とり算数競争の発展として、つぎのA′の実践は創造されたのである。

A′の実践——男女対抗算数競争

男女対抗算数競争とは、教師が出題したものを、ひとりひとり取り組み、一問ごとに、正答者の人数を男女で競争する学習。十問で一試合とした。一学期の、六つの小グループ間の旗とり競争から、この実践は、男と女の二つのグループ間の学習競争へと、高めていったのである。

実践の動機　動機は、G問題の授業。それがA′の実践を創造するヒントになった。しかし、ヒントはそうであるが、A′の動機には、Aの実践の反省と関係して、つぎのことが含まれていた。

① 学級全集団の中で、ひとりひとりの力を常時点検し、確実に学力をのばそうと考えていたこと。

② ドリル問題中心と、文章題中心の二つの授業の関係を緊密にし、算数の授業を一本化しようと考えていたこと。

③ 教科の進度と理解との関係を解決しうる、新しい授業の型を創造しようと考えていたこと。

④ 心から勉強をすきになる子どもを、さらに数多くつくりだしたいという欲求が強く働いていたこと。

これらのことが、A′の実践、男女対抗算数競争を生む動機を、形成していた。

実践の内容と方法　男女対抗の十問競争。座席は普通。教師は黒板の右端に、チョークで簡単な得点表をかく。子どもたちは、教科書、ノート、筆記用具を用意する。教師は採点用の赤いボールペンを四本準備する。

教師が口頭あるいは板書で、一問ずつ出題。「よういー、はじめ。」で、この男女対抗算数競争ははじまる。子どもはひとりひとり、ノート、あるいは四分の一の西洋紙に解く。できた順にノートをもって、教師の前へ一列にならぶ。教師は、合格一番になった子どもに○をつけ、そ

そのときの問題によって、集団の中でリーダーが生まれ、また、リーダーはかわることができる、と、そんなふうに堅苦しくなく考えているのだ。

では、なぜそう考えたのかを、つぎの例で説明する。

教室に五人の子どものグループがいたとする。そして、算数かなにかのテストをやったとする。そのとき、速度をふくんでの理解力そのものは、必ず、1・2・3・4・5と序列がつく。理解した面では、1が、2・3・4・5に対して、リーダーになれる可能性を持っている。しかし、この場合、1がいなくなったとする。そのときは、2が、3・4・5に対して、リーダーになれる可能性を持っている、といえることになるのではないか。

このように考えてみると、はたして、リーダーは固定しているだろうか。算数だって広い学習領域がある。一つの問題で理解力「1」をしめした子どもは、はたして、どの領域のどの問題についてでも「1」になることができるだろうか。まして、教科はたくさんある。遊びや仕事もたくさんある。だから、そのとき、そのときの問題によって、集団の中で、リーダーが生まれ、リーダーはかわることができる、と考えたのである。

私は教師として、学級のどの子どもも、リーダーになれる可能性を持っていると確信している。

（中略）

私たちは、「生き生きした学級にするには」とよく口にするが、結局は、学級の中のひとりひとりの子どもを、リーダーにさせることによってのみ、それが可能になるのではないか。

典型的なリーダーは、学習するときでも、仕事をするときでも、「みんなのために、自分のために」という、集団と個人の利益を統一させた意識をもって行動する。このようなリーダー・シップを徐々に身につけていく子どもたちの学級集団こそが、現実の問題を自主的にとこうとするエネルギーを発揮する。

その状態を側面から、全体的にみたとき、それを、「生き生きした学級」と私は表現し、部分的にひとりひとりをみたとき、それを「生き生きした子ども」と私は表現する。（後略）

（注）「学級の全部の子どもをリーダーにさせることをめざして」　執筆者　高橋　圀夫

〈一九六四・七・二〇　発行の校内研究誌『スクラム』2号より転載〉

私は、このレポートを何度も何度も読みかえし、掘りさげてみた。その結果、

一　今までもっていたリーダーに対する私の考えが根底から崩され、やる気になれば、私でもリーダーになることができる、と目を開かせられたこと。

二　その仕事の、その学習会のリーダーに誰がなろうとも、そこに参加している仲間たちが、平然とそれに呼応している不思議な謎を解くことができたこと。

この二つを学びとることができた。

よし、私も、若い教師たちにまけずに、リーダーになってみよう。そして、リーダーらしい行動を続ける中で、自分をたたきなおし、「反発の教師田上」から、「裸の教師田上」へとつくりかえていこうと思った。

その　3

そのときの問題によって、集団の中でリーダーが生まれ、また、リーダーはかわることができる、と、そんなふうに堅苦しくなく考えているのだ。

では、なぜそう考えたのかを、つぎの例で説明する。

教室に五人の子どものグループがいたとする。そして、算数かなにかのテストをやったとする。そのとき、速度をふくんでの理解力そのものは、必ず、1・2・3・4・5と序列がつく。理解した面では、1が、2・3・4・5に対して、リーダーになれる可能性を持っている。しかし、この場合、1がいなくなったとする。そのときは、2が、3・4・5に対して、リーダーになれる可能性を持っている、といえることになるのではないか。

このように考えてみると、はたして、リーダーは固定しているだろうか。算数だって広い学習領域がある。一つの問題で理解力「1」をしめした子どもは、はたして、どの領域のどの問題についてでも「1」になることができるだろうか。まして、教科はたくさんある。遊びや仕事もたくさんある。だから、そのとき、そのときの問題によって、集団の中で、リーダーが生まれ、リーダーはかわることができる、と考えたのである。

私は教師として、学級のどの子どもも、リーダーになれる可能性を持っていると確信している。

（中略）

私たちは、「生き生きした学級にするには」とよく口にするが、結局は、学級の中のひとりひとりの子どもを、リーダーにさせることによってのみ、それが可能になるのではないか。

典型的なリーダーは、学習するときでも、仕事をするときでも、「みんなのために、自分のために」という、集団と個人の利益を統一させた意識をもって行動する。このようなリーダー・シップを徐々に身につけていく子どもたちの学級集団こそが、現実の問題を自主的にとこうとするエネルギーを発揮する。

その状態を側面から、全体的にみたとき、それを、「生き生きした学級」と私は表現し、部分的にひとりひとりをみたとき、それを「生き生きした子ども」と私は表現する。（後略）

（注）「学級の全部の子どもをリーダーにさせることをめざして」　執筆者　高橋　圀夫

〈一九六四・七・二〇　発行の校内研究誌『スクラム』2号より転載〉

私は、このレポートを何度も何度も読みかえし、掘りさげてみた。その結果、

一　今までもっていたリーダーに対する私の考えが根底から崩され、やる気になれば、私でもリーダーになることができる、と目を開かせられたこと。

二　その仕事の、その学習会のリーダーに誰がなろうとも、そこに参加している仲間たちが、平然とそれに呼応している不思議な謎を解くことができたこと。

この二つを学びとることができた。

よし、私も、若い教師たちにまけずに、リーダーになってみよう。そして、リーダーらしい行動を続ける中で、自分をたたきなおし、「反発の教師田上」から、「裸の教師田上」へとつくりかえていこうと思った。

その3

私が君たちに残すことばは、「健康に注意しろ。」ただそれだけだ。
おわりに、君たちが、今持っているそのすなおさを最大の武器にして、日本の教育の前面に大きくはばたいていってもらいたい、と書きそえておく。

〈43・8〉

人間高橋圀夫論

樋渡和子

竹を思わせる

『太閤記』を読んでいた彼が、ニヤリとした。「家康と信長と秀吉の三人の性格のある部分が、オレの中にある。おもしろい。」という。私も負けずにニヤリとして、「そのうちで――一番似ているのは信長でしょ。」といった。「そうだな。フッフッフッ。」と笑いながら、満更でもなさそう。そして、戦国時代に生きてみたかったという彼。「彼なら、百姓の小せがれに生まれたとしても、一国一城の主にまでなったであろうに」と、隣席の私も、四百年おそく生まれてしまった彼に対し、残念の意を表わした次第であった。

鼻高からず

さて、信長の現代版――高橋圀夫氏のところへ、役場から一枚の調査用紙が配布された。いつものごとく、「樋渡さん、あんたなら大丈夫、信頼しているからね。頼むよ。」というわけで、

その用紙への記入は私にまかせられた。信頼されたいじょう、私も本当のことを書かなければいけないと、責任を感じつつ、つぎのように書いて提出した。

氏名	高橋圀夫	(男)女	大正十五年十月四日生（三十九歳）

一　身体について
(1)　中肉中背で、頑健そのもの。下腹はホテイさんに似つつある。
(2)　運動神経、発達している。球技は何でもこなすが、遊戯やダンスはゼロ。
(3)　足あとを見ると、左右の足を約十cm広げて歩くことがわかる。
(4)　カミの毛が薄くなりつつある。特に中央部。

二　容貌について
(1)　浅黒く、面長、ひたい普通の広さで眼細く、鼻高からず。唇うすく、歯ならびよし。
(2)　平板で、総合すると美男子にはだいぶ縁が遠い。

三　性格について
(1)　激しい、の一言につきる。

その他
●男性らしい声でエラク大きい。校舎の端から端まで、ゆうに聞こえるので拡声器の必要なし。
●食欲旺盛・千貫小随一。

調書提出後、「彼について、もっとくわしく書いてみよう。」という意欲が湧いてきたので、

心の灯を高くかかげ、働き続けている教師たちがいる。しかも、彼らは、無名であることを誇りにしながら、ひたすらに地域と日本の教育の前進のために、価値のある実践と理論をつくりだしてきている。

この本は、これらの、山や、海べや、農村や、都会の大地に根をはって生きぬいている、無名の仲間の教師におくりとどける、私たち無名の教師からの手記なのである。

教師たちの中の教師諸君！

私たちは、日本の同じ働く仲間の立場にたち、君たちに心からの激励をおくると同時に、日本の教育を、無名の大多数の教師の力で推し進めていくそのために、私たちと行動的連帯をしよう、と声を大にして呼びかけるのである。

一九六八年十月一日

『教師たちの中の教師へ』編集委員会　高橋圀夫

● 研究同人

校長　遠藤　信　高橋圀夫
教頭　氏家寿信　伊藤　尊
伊藤フクコ　吉田勝寿
八木よし　平塚　孝
佐藤ふみ子　松本ムネ子
西方芳樹　伏見邦子
伊藤ひろの　大宮徳男
米山昌宣　田上昭吾
大泉忠明　三浦謙蔵
半沢　清　三品みよ子
蜜波羅美和子　大江俊一郎
葛城典子　〈昭和43年度現在〉

● 転退職

佐々木　正
斎藤準一
樋渡和子
佐藤ちゑ子
斎　温子
三浦美智子
佐藤勢子
斎藤信子
佐藤すい
黒田喜久子
太田俊吉
〈昭和40年度以降〉
清野栄弥（元研究推進部員）

● 編集委員会

高橋圀夫
大宮徳男
西方芳樹
大泉忠明
平塚　孝
伊藤　尊
田上昭吾
米山昌宣
半沢　清

1年生
これだけ
複刷
!!!

教師たちの中の教師へ

定価　650 円

著　者　宮城県岩沼町千貫小学校
教師集団著
電話・岩沼(022312)2536

発行者　藤　原　政　雄
印刷所　横山印刷株式会社

発行所　明治図書出版株式会社
東京都中央区入舟町3—3　郵便番号 104
電話（東京・551）8266-8 振替 東京151318

検印省略いたします。

1969年2月初版刊
1969年3日6版刊
1969年4月11版刊
1969年6月14版刊
1969年8月17版刊
1969年9月24版刊
1969年10月30版刊
1969年11月34版刊
1969年12月35版刊
1969年12月36版刊
1969年12月37版刊